

IEEJ Industry Applications Society News Letter

電気学会産業応用部門ニュースレター 2005 年 7 月号

産業応用部門編修長就任にあたって



深尾 正

はじめに

いうまでもなく論文は学会の生命である。それだからこそ、「難解で関心があるのは一部の会員だけで、大部分の会員にとっては何の役にも立たない」、「査読が遅い・偏っている」、「投稿料が高い」など、会員諸氏から多くの苦情・批判が寄せられ、毎年のように様々な改善が行われてきた。電気学会の扱うべき領域の拡大や国際化の要請などの一方、情報技術の進歩で大量の情報が即座に得られ、会員間の情報交換も極めて容易に行われるようになるなど、学会を取り巻く環境が大きく変化している今日、いままでの延長上の改善では、これらの技術の有効な活用による諸問題の解決とこれからの発展は不可能である。産業応用部門では部門役員諸氏の多大なご尽力により、組織改革が行われてきたことは誠に喜ばしいことである。改革の詳細は、昨年の高松で開催された産業応用部門のシンポジウム論文や、10月、12月のニュースレターで紹介されているとおりである。新しい部門の組織と査読のプロセスはできあがった。今後はどのように論文査読を行い、どのような論文を取り上げて行くかという本質的な課題に取り組んで行くことになる。この改革によって、部門に編修長という役が新設され、不本意にもこの大役を仰せつかる羽目になってしまい、はなはだ心もとないのであるが、大任を果たせるよう会員諸氏のご支援を願うばかりである。

この機会に学会誌の論文、査読に関して日ごろ抱いている考えを述べて皆さんのご意見をお聞かせいただきたい。

論文のカテゴリーについて

部門誌に掲載される論文には、創造性、新規性、有用性のいずれかの条件を満たしていなければならないことになっている。調査結果の体系的整理、電気工学の教育や製造現場の工夫など、学術、技術の発展に役立ついろいろの分

野の論文をもっと積極的に取り上げるべきである。

著者の責任について

自分の論文の創意、新しさ、あるいは有用性を読者に分ってもらえるよう、著者は最大限の努力をすべきである。自分がその論文で明らかにしたい課題やその必要性を、証拠を挙げて説明し、結言には緒言で指摘した課題・問題点の解が明確に述べられていなければならない。創意、新規性を認めてもらうためには、過去の研究の十分な調査が必要で、それを証明する必要かつ十分な引用文献を示すべきである。自分の論文しか引用しないで、読者には創意、新規性が納得できるわけがないと認識すべきである。また、理論を展開するに当たって仮定やシミュレーションの定数の選び方の妥当性を証拠を挙げて説明し、理論の妥当性を示す実験結果が適切な実験条件の下で得られていることを明確に説明すべきである。論文の強みも、弱点も知っているのは著者だけであり、論文の内容についての責任はすべて著者にある。

査読について

査読は論文指導ではない。まずは、論旨に明白な誤りや矛盾がないかを確認し、創意、新規性、有用性を証明する必要にして十分な証拠が揃っているかのチェックに徹するべきであると考え。その上で、論旨や構成の適切さ、読みやすさの評価をすべきである。論文の評価は読者が、あるいは後世の読者が決めるのだと思う。自分の主張に沿うように修正を要求するようなことをすべきではない。

おわりに

専門の知識に欠ける査読者にあたったために、不適切な指摘を受け、掲載までに時間がかかったとの苦情をよく聞く。しかし、狭い範囲の専門家だけにしか分らないような論理、言葉で書かれた論文は結局は一般の読者には理解し

てもらえず、学術、技術の発展に役立つとは言えないであろう。今までになかった新しい分野を開拓した新規性の高い論文の分野の専門家などまだ居ないはずである。その意味では、査読者はその投稿論文の分野の専門家である必要はない。電気工学の基礎を身につけた読者に理解できないような論文は結局は役に立たないといっても過言でないのではない。

私は常々、論文の作成と査読は、JABEE(日本技術者教育認定機構)の技術者教育プログラムの審査申請と、審査・認定の関係と同じであると考えている。著者は査読者、従って、読者を説得できるように、創意あるいは新規性あるい

は有用性を説明できる客観的な証拠を取り揃えて、論文を作成する。査読者は必要にして十分な証拠が揃っていて、論旨に誤りがなく、読みやすく書かれているかをチェックする。著者の主張と査読者のそれが一致しているかをチェックするのではない。

著者も査読者も D 部門の論文に関して共通の認識を持っていただく必要を強く感じている。そのための、マニュアル作りや、情報交換が必要と思われる。読みやすい、役に立つ、多彩な論文が多数掲載されるような論文誌になるよう、会員の皆様のご協力を重ねてお願いする次第である。